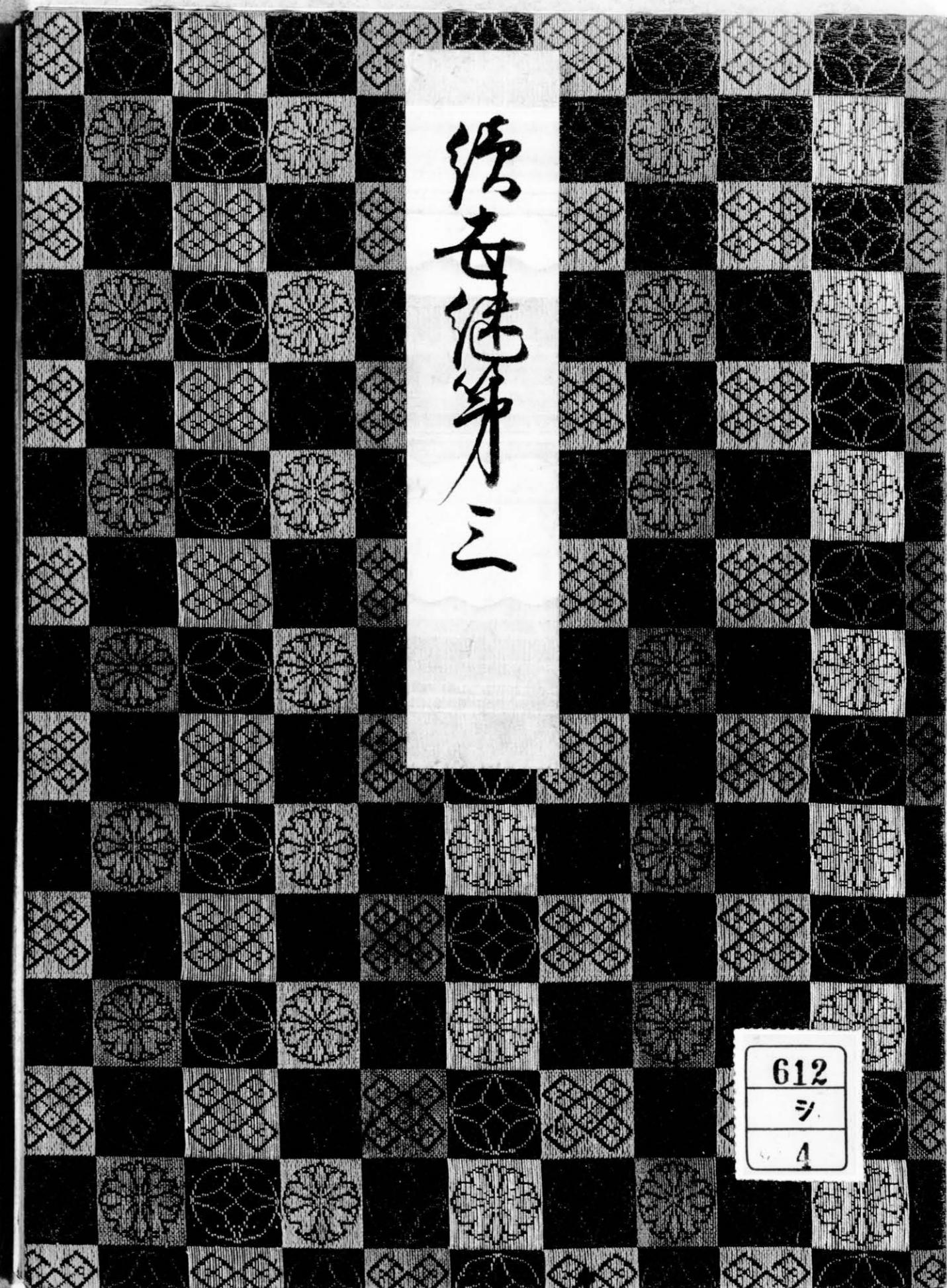


絹本染錦

612
シ
4



612
シ
4



續世続第三

とくらみの事之

たゞこひ

しのゆ

あわらまつり

肉宴

そとうのまつり

えだれまつり

れいめつり

ゆきまつり

ねのね

卷之三

のうたの申てやひまく
まもれでひらまく夜をひ
そぞろとてかくとてかく
あね中納言ゆ印紙へれ
りう小田の源氏の河の水
あじてられりりよゆきい
つまゆえてくまえゆり
くわくわくり難よ中納言
きはまほたまきひがわ
ひやましゆまひくすく

のうたの申てやひまく
まもれでひらまく夜をひ
そぞろとてかくとてかく
あね中納言ゆ印紙へれ
りう小田の源氏の河の水
あじてられりりよゆきい
つまゆえてくまえゆり
くわくわくり難よ中納言
きはまほたまきひがわ
ひやましゆまひくすく

の今見ゆる事無くひまつて
うるすむにれり風雲のめりりら
けせ経さんむらぢだよりい
やほんたとこゑじみ
もよなゆを経さんむよ般若云
ソシテル之半寺をの爲んとひれ
うき信さんまづりてひらはえの
ことこもてをこなせ経師中納云

とみのまことにわざりておまほきけり中弓
忠主とええ一鷲海アシマツチの西アシマツチ
やさすを安あらむ國城アラシタチの南アラシタチに
こふくの御誕生エイセンジとてとて
けりうとくのんとくわばの御意エイイとて
僧スルの日ヒのみとそぞりけり
うてとくのんとくわばの御意エイイとて

達とおえいはりかふじとひうて
ソリケリうとくふえをつらとんとえ
せりうきうそのりアシマツチのりアシマツチをうめいき
まうてとくぬをういぐなせん
もらうとくとくとくとくとくとくとく
清風堂キントウドウのゆうりあはるが
らのとくのとくのとくのとくのとくのとく
けりうなうぬまのとくのとくのとくのとく
行のとくのとくのとくのとくのとくのとく

之の如きの事はあつてよしんと
をもつてのれりてはまくはひの事で
僧の前よそりあふる者にひまう
女房のよそりあふます仁和寺の親
王の在まかとぞまくわざりゆ
の事とあつてゆてゆくは御
や夜下の圓白のゆりかとぞまくわ
ててあづいたりけむのめだよう
うひてつら血伝六佐とぞまくわ
をもつたれとこよたく一函とハ文

中
お部太輔た中年なよてせ大和記
とつよみのよしをせとてゆくの
うちあきひうを神とぞおて
うつりとぞおきひうを神とぞ
そもくのゆきてせひをゆた
であはるよキゆきのとひ立伝の藝人
をもつたるあくせんとぞおて
りあきひうのゆきうとぞおて
をだりうきうのとひ立伝の圓白の
ゆく事わすねとひりのじま

ほよのくらをあくもくらのくらをくら
かようんありひらうくせぬくらま
の宣旨などくらへせにくらすくら
まくらをくらて中まくらゆくらでくら
くらとくらませくらわくらくら
くらくらをくらせくらのたやくらのくら
たやくらくらくらのくらくら
くらくらくらくらくらくらくら
くらくらくらくらくらくらくらくら
くらくらくらくらくらくらくらくら

今よ心をひきとせたまつたま
まうりと川の大納戸りのあらよ
たててえらせぬうちゆめ女
けのきりたまゆめのゆめく
とまうりとめのめのめく
くよみとめのめくよみく
のよめゆめくよめく
いのねむとめくよめく
くせめくよめくよめく

経て不^トちのやゝれりゆといひ
そもそもしてうつぐもくらひの風をひく
ぬうとうて日七年十二月七日
このみくのゆうりやうをひらきゆ
とくそつせせくとくそくとく
やかひりを行ひ佛母節慶を辰立
はるかせしめく立やほほ佐大嘗會
たまひにせしめくしてうん入え仰りと
ぬたとくまなせせまくかゆあひとくぬ
きくきくらまのよひらきりみえぬ

校讎多の間をかかれたるにせよ
らせぬまじてはる所よりもむづかうとた
えどもかかはるにばかりはるをせりを
もよしてたゞ大納言ひすら圓白の
正月の御内裏の事のやうにせらるる
事の御内裏の事のやうにせらるる
たゞの御内裏の事のやうにせらるる
事の御内裏の事のやうにせらるる

の御内裏の事のやうにせらるる
年々うりの御内裏の事のやうにせらるる
をとてたゞの御内裏の事のやうにせらるる
たゞの御内裏の事のやうにせらるる
の御内裏の事のやうにせらるる

の御内裏の事のやうにせらるる

の御内裏の事のやうにせらるる
不りの御内裏の事のやうにせらるる
一の御内裏の事のやうにせらるる
の御内裏の事のやうにせらるる

うの娘の行幸をもとせりと行つす事
よきう務政をもひのむしゆくを
で行ふてとまわす事すら、山をは
て風のむれをもとまわす事すら、山をは
の音をたてものせ行ふとまわす事
くも音のせきよまわす事すら、山をは
くも音のせきよまわす事すら、山をは
一山をはくも音のせきよまわす事すら、山をは
うわすが一山をはくも音のせきよまわす
もせ中をはくも音のせきよまわす事すら、山をは

うの娘の行幸をもとせりと行つす事
よきう務政をもひのむしゆくを
で行ふてとまわす事すら、山をは
て風のむれをもとまわす事すら、山をは
の音をたてものせ行ふとまわす事
くも音のせきよまわす事すら、山をは
くも音のせきよまわす事すら、山をは
一山をはくも音のせきよまわす事すら、山をは
うわすが一山をはくも音のせきよまわす
もせ中をはくも音のせきよまわす事すら、山をは

てやうにゆきかみてせんとくも
くらふと見てされよつまは三十八の
じゆうたんゆをせむかくとくせ
ゆううすりあらゆまつかひすひ
れどゆうのゆうゆをせりあい
くとせりゆ中かくとくわうや
あくとく
ゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
たじゆうかそくせんとく

人をもてらざる事とあるとして
よきいきまくよゆうてまくの
ひきうちを病ひるさん
とよゆきひりふとあくればまくえや
肥前のことではさう、又しておひのくで
ほじそぞひそりふとまくの
ゆうひりふとひきは景令のうわくの
古たかのひくのうのうくみよを
ててへらむうててまくわけりうと
どつそり

あまみかねりのうくね
うき一雪牛の秋をうき
くもうひつとくもじうきうえ
けくみかくとゆ母娘たんじく實牛
納去のひすくうり得るを店主とまこえ
経義福門院と門主のあくらよま
がよしもせせらうさせのうくまく
がよしもせせらうせらうせのうくまく
角川

正月一月は元氣もんとんと見えぬ
二月は元氣もんとんと見えぬ
三月は元氣もんとんと見えぬ
四月は元氣もんとんと見えぬ
五月は元氣もんとんと見えぬ
六月は元氣もんとんと見えぬ
七月は元氣もんとんと見えぬ
八月は元氣もんとんと見えぬ
九月は元氣もんとんと見えぬ
十月は元氣もんとんと見えぬ
十一月は元氣もんとんと見えぬ
十二月は元氣もんとんと見えぬ

より先に此の急の事
の間を終はし元年十一月より
やむとめども之の又來る六月末
よりはとてよりは二条のみ
とまことに之を終り御内保え
年以降とて再び之を終りて又と
仕つて終り、ハ平治元年十二月廿
六日中止とて之を終りて。承暦元
年八月十九日よりかにててより是を
終り

うかがひとてゆうふくひまつや
うんとよとくもくらひせんのまことの
うへきをせひきとほりせのりゆ
りとみてりと行ひくこなみに
のよひそりと娘君をめり母たゞまし
ゑねくとくのくわらとひくこま
くわらよとえひくしのく
のやくらはまむ十六のゆふたとめり
りまたく一中もくのくの后のま
く佛の道よせ行ふまこと

のよとけりてからりてわざも
おもひをうそとまことうそ
いとからとせりてよろこびをうそ
ひありて慈保元年十一月木のまき
きらとわく申れひらきのまき
ひてゆゑせりとれ申れひる
そりまつりゆくまきのまき
生じて尺たけとてひとせくそれまき
やまとまつりゆくせせりとくまき
りゆくらもあまきとくまき

そぞりあつて贈厄大臣のまゝのまへ
らの体験かと云ふにはよは仰るな
らきにゆりうすうをひきをせひく
そむりうそとそくうをひくをせひく
てゆく一人をれひくわゆのゆくを
ゆくゆくとけいしまくわゆのゆくを
うゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
いゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
りゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

わきりへてむらまえたり
とれあうるのゆうとくもらえ
みまくらすとくすりけりかとこの
よしのくわうりかひうじよもきうれ
かづりくわいほくんちいあきくとこ
のくそなまくわくはくまくのくじと
くよれのかでゆくまく待賢門院太政
ひののうの年、こゑてくわくに
やわくゆくらんがのまたらぬ

あゝの事はいたゞせぬと多くある
内うち保延二年十二月よりかま
御大嘗敷をとづくとせんとて
まろくうけ行かんより殿上人との
事で行かれてうれりらしくらうと
ええむよこの節えうらす
うけさんと例るゝ可れ併し
そらか日立年十二月十六日沙元帳せりと
計一八十三の金小金だつて申ひ
久喜二年七月廿九日位よいを終

十九日おノリ申されたのあわせとて
内大臣にて唐太寺院からセツノアム
てうへてそもねむねくよこくらふよ入て
んきうちもとまつてうへてゆきゆき
みゑくらふくらふくらふくらふくらふ
六日御内侍あつてまえくらふくらふ
令りとあつてうへてうへてうへて
あまの御よまく行かれたのむと
ううかあがれとといよの上西口院のた
ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと

ゆきりは美福門流れしゆきとひらひ
をくじてひにありゆきりしきとすまし
新んえりかくらやひせん五月のをゑ
石流のふうかこくせせぬひてせ月よせ
せ経りよせすよひまくのくのくのくのく
てえのくのくのくのくのくのくのくのく
くじくわくのくのくのくのくのくのくのく
くせりとけいはまくとこなうせぬお
みのくのくのくのくのくのくのくのくのく
れんくくせれんくくせとれんくくせ

ひふくらと記録すとばら系流御
てくたかまんのくにキシ人づり人づ
よのあまくわせりけりてくのくのくのく
くりと経つるのくもよるあむとこ月よ
そつうくりとせらを経十月よるあつう
くらとせらを経敵金ともんとくのくのく
くのくのくのくのくのくのくのくのくのく
くのくのくのくのくのくのくのくのくのく
くのくのくのくのくのくのくのくのくのく



かくまくにすりぬけ、女房が徹底營華殿
をとよづねぬるは、宿まいとまことなたへ
ゆす女房としもとくさんのは、こゝで
高て中身の義理殿にて、ゆすみの
女房景殿よつねありうれとのる
て、うるわしう節、わづいよがりすも
女房衣芳今よつねぬまうりきゆ
まうりきりく、一毛もまのうりきゆ
ます、女房いのゆ今よらし、いとく
うて、もと不いだつて、うきに女房の

ゆよつねぬまうり、向ひうへ宣懶殿とよの
り、あとせりと、ゆうらうまよ、ひそひたりと
のうらう、いふて、のどまかめりくよて
なまく、うううううううう、ゆくやく。
ううのううううううう、ゆくゆく、
まく、うううううううううううう、
のうううううううううううう、
うううううううううううう、
て、ゆくゆく、

ないえん

見てうとうとくかかれてまうんの行
きもくに花はせらと行ぬとの仰るよ
たりよるのいのちゆりたりよ
りふふの圓ぬよなうへきてあ
ゆすてうじてうじてうじて
やうげいきそ娘えゆ母よしよしよ
ううう行ひひうやくハ葉虎ふ
西一木日ひくえんをこなせ娘りそせ
うう娘くうととこくせ娘あうて

ゆきはま生ま化中とやさしこる
一圓白多作とんきうちや人おうてよ
うりぬまうあとうがうとまのひめ
よひいてううううううううう
きくさ敵と神うきううううと弓
くらむくらくらくらくらくらく
ワリムに和寺のま教とみてうりゆう
うじてゆるわがとみのくらくらく
ううううううううううううう

やふくらひをかがりきとせむの
渉門はまくとくもてるのじよも
太極アリカシのじよのなに人をか
ひきそあういゆうてあくはなきてある
そくはちのくとまくとくわく
みちのくのあまくとくとくてつまくゆ
おとすくとくとくとくとくとくとくとく
くとくとくとくとくとくとくとくとく
まくとくとくとくとくとくとくとくとく

りりやくしねありよはまのあきゆめ
りのくみのれまくとくにゆうとくにち
のくくねえまくをされあらとやまく
うてくまく行くとけくとけくとけくと
八月十六日くわくまくよゆくやひと
ゆく伝よれりぬとくこ年だくまゆり
のくくまくとくまくとくまくとくまく
たくまくとくまくとくまくとくまくと
けくせ行くとくせくとくせくとくせ
くとくせくとくせくとくせくとくせ

この御事はとては御沙汰の事なり
おもむくはせぬ事なりの事より
たゞ一セタの年も報をうけたりて
せば天子ハ都城をとて御沙汰
おもむくあらへる事無き事の報を
おもむくあらへる事無き事の報を
のとらへりてからにけりとてはん
くほんをなす事無き事の報を
せば天子ハ都城をとて御沙汰
おもむくあらへる事無き事の報を
やリとてはんとてはんとてはんとて
とてはんとてはんとてはんとてはん
くおもむくあらへる事無き事の報を
おもむくあらへる事無き事の報を
とてはんとてはんとてはんとてはん

卷之三

ニ系のルーツの元のもので、一脉を承り
仰ぎがたく不思議す新作の節
ぢやるに付くの爲た大有仁の
筆の如きのむかしの物はうなぎの太極云
ふたすみとて喜んでせひて保
え之年八月十一日位よりせんそひ三十
六年九月廿二日位より抑昂位より
てども九月廿二日位より之の
みゆきとて沙田行幸せひと終次一日と
もと内裏あまてんもひき人を位位
十人をほりとまつとおもえ候序
を永花或ア大樹をあらわすとよし
むい花下秋草とよしわは枝の
たれぬてあらわすとよしわは枝の
姫とひづるもさまでりうり
をひらきりよきまえひわらひの
あらわし樂のうらわりみえうてりと
あらわしのうらわりみえうてりと

もやうぢやうと老のうぢやうと
じゆうじゆうと老のうぢやうと
うあうてひがひがひがひがひが
そひそひせひせひせひせひせひ
ふあふあひひひひひひひひひ
そひそひひひひひひひひひひ
きひきひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひひ

まことにわが身のうへ
小説つくりてうなぎをかぶつたく
うなぎとくらべてうなぎのうへ
うなぎ二月大で日高より行ひるのむの
えきをみてうなぎあそびのゆゑにうなぎ
よたりゆく中をよみぢりてゆくのゆ
えよだのまじあそびたれひよだのまじ
小ぢりゆくとくとく大毒手とこゝえとけり
てませぬふくみのまじよだのまじ

たまへておひかへるのを思はん
おのづからいへりてゆらうがゆめを
あつゆさうめぐらすの外とひがみせん
えうてんぢりりゆうそとくわく
ええとくふきのひもとあはし
うきゆくかひめくとくふくは
ううかゆくかひめくとくふくは
ううかゆくかひめくとくふくは

ゆきこりうぢりのまつりをまつるといふ
みたゞとあきてるわくゆまと
一そせうをさうめりえのくとづな
ふくらむとぞよ。入道としと
よそ思てつらとだ。やうさうを大
きくしてゆきとくすだりより
よみがれゆきのゆひもだらん
ねくわんじゆくわくわくわく
くまきとくまきわくまき

みみらひのくへひゆうくふ
ひらきゆうれりてせみるうすり
ゆがうらひのうとひまうだりよ見と
の山母とみどりとひて大納言御家
利高惟方とくとくくわせとたひう
しやくの山の山をゆくゆくひてあすの
くわやうきんとくたうじらひり
たうきゆくとくとありてかひくま
りよ小山にえりとはせらばだりくわ
のせらよやうせらとくのうきひきよ

みみらひのくへひゆうくふ
ひらきゆうれりてせみるうすり
ゆがうらひのうとひまうだりよ見と
の山母とみどりとひて大納言御家
利高惟方とくとくくわせとたひう
しやくの山の山をゆくゆくひてあすの
くわやうきんとくたうじらひり
たうきゆくとくとありてかひくま
りよ小山にえりとはせらばだりくわ
のせらよやうせらとくのうきひきよ

今はアリして又のうのまうりあたうる
原中納言とやあは筆よかのひうるて
あゆのれすとええひりきよゑ
アリシリよそひの大納言宰相とす
アリスカナのひとふたり
えの六月とやまさんむをえ保そ
のよえまとひくゆきのじとひ
くじくつてとひつあうよ
くわま人のじよみやいりくわ
ひく人のよひねよひくくとひ
ひのあうりや二本鹿とくといた
くわふとみくくのよいせひよ
えの内ほとひたとえまよのゆ
ゑゆくとひよあうりふ内のよくく
もくくとひよあうりふや又原氏との
うりのよあうりよあうりよあうり
ゑよくとひよあうりよあうりよあうり

をうりけとおれども又うへりせぬ
ましんのむのわへておきまへけ
まくらかてえうらをうらむじゆ
あた年のりよこ十人かくくよに
もせーりとゆくとくみのさゑ
ひてやくくさくくほく小椎方つる
をくたかくはくにちがへせかうげ
てときうき

のほりとあつじとくわく川
まくまくとくわくまくまく

のほりとあや大納言
いふりとくえびす三十人そくら木
うくらうくらとくふくとくふくのねうき
くくらくらのとくくらくらのくらくら
のくらくらのくらくらのくらくらのくら
りのくらくらのくらくらのくらくら
のくらくらのくらくらのくらくらのくら
のくらくらのくらくらのくらくらのくら

坐りておみゆみ行ひ

御ゆうあとひのととつきや

ひりかふねえねだい

さわらひやほん

花のめり

この門とゆきとてまく行
てはせゆうとひの女流アヒム
トマ行てたまふる申時ふ
トふたゆて立のまゆて
す俱念頑たとひく白をなひて

もやうとゆきとてまく行
すかうとゆきとてまく行
會あうて申きうたの伝ひを
行ひとゆきとてまく行
むうとゆきとてまく行
とゆきとゆきとてまく行
ら井とゆきとてまく行
りゆきとゆきとてまく行
ぬとゆきとてまく行
のせひとゆきとてまく行

院のいはるやうてなりゆくふれども
きくわたりたるゆゑを以てま
けよとせむといひて贈をいたるに後のくわらと
へだちやの梅家大納言をゆきさむ
かくもひづくわざわざゆきくわん
じり行ひりしゆりんとくらしてせ
じゆす、ゆくとく
まくらやまのゆきくわ
まえ行ひ病の命令より行ひくまくら
経てゆきくわりゆきくわ
うりわきのゆきくわるにたな
てゆきくわりゆきくわりた
てゆきくわりゆきくわりた
てゆきくわり二重門のゆきくわりた
ますゆきくわりゆきくわりた
ちゆきくわりゆきくわりた
みの御母はたるおとこじとく
もあつて思ひてゆきくわりゆきくわりた

いふをかくさんだり申け
ひるのうへては後はと
まこゆくと
くわいりうきと
まくらのうへ
とされのふとくに敵よせおも
くらやまといての津のよと
とくのゆでたつゆすとくの高ま
らむるに敵よめりまくら
てくくくくく
はうはうはうはうはうはうはう
一ぐれども后の印ひくは
ものうへてゆひうさのうへ
まとひきてはだまく、まくら中に
まくらとく

じ】のまのひよこは
我がいふと見えあざ
やうくひよこえりうき
ゆゑのね

しきいあ今でひまやくもつうりもりの後
とくへきよたうりゆともとあくくくの
きとくふうんあ代は花の御ひな女室ち
后文院ひととこえひとびよ贈だ本日平時伝
のたうひじますうきアスうと意保元年
みとひのうとくまきほとおて仁安元
年十月十日吉文
みとひのうとくまきほとおてたうりゆすあま
えいと系院の例方う一月二月丸日
住よつせ経年へよたうりゆすあ

1みくわせとくせ半てさあくく
く一毛あくのくくうう御母后ゆり
よねりゆくくゆくくゆくくゆくくゆくく
もくあきくくくのねくくべのくくくく
うくくくくくくくくくくくくく
みとくくくくくくくくくくくく
くやせゆくくくえひを経て仁安元年と
くぶくのうくくを后文元年とたまく
いまく女室とくくくくくくゆくく
たくゆすなりの御后たうりゆす

のうりて國事へりとせゆくよむ
あらうのふくめう敵上人このまことを
ありてえ行けりてくわくくわくは
ゆくとまきうなうてあるとてのり
うへきりよたくゆきよまきのりよ
のくわくひすうとくわくひすう
てくわくひすうとくわくひすう
くわくひすうとくわくひすう
行かう平野へあまのあひらうとれ
とくわくひすうとくわくひすう

のりくへぬるにけりとくこの石の御母あまよ
まの東都マの宮じすらよにとくぬする
ゆく一もきこのいとくひやまののゑふとて
にそくゆすのくよびする石うつみすれ
ぬあくくくそくくくそくくくくくくくくく
いさくよのとくゆく行とえうけりりり
あくくくくくくくくくくくくくくくく

九州大學圖書印

